

# 社会科学部を看板学部にするために\*

NY への道のり

山口伊織、北村拓也、小西一輝、成林陽太郎

## 1 はじめに

現在、オンライン教育が発達し、スマホで講義を受けることができるなど高校教育が大きく形を変えつつある。そのような中で大学教育も革新的なスピードで変化している。現代ではオンラインで様々な名門大学の講義を受けることができる。この授業形態が世界で主流となり、しっかりと体制を整えたときに誰が普通の大学の普通の講義にお金を払うと思うか。世界に 10 の大学しか残らないという考えは現代では非常に非現実的な考えであるが、50 年後の社会ではその非現実が現実になり得るかもしれない。

ここ 3 年で早稲田大学は世界ランキングの順位を 400 位から 800 位へと大幅に落としている（「World University Rankings 2017」より）。日本のトップである東京大学でさえも世界では 34 位。アジアではすでにトップではない。なぜこのようなことが起きているか。我々は日本の大学教育が世界の変革の流れについていけないことにあると考えている。日本では従来の形式ばかりに捉われていて英語での講義や魅力がある講義、つまりは学生にとって学ぶ上での価値をもつ講義が少ないと考えられる。

しかし、QS Graduate Employability Ranking という雇用者の評価、雇用者との連携、企業などの学内採用活動、卒業生の就職率等を評価するランキングでは早稲田大学は世界 33 位、国内では 1 位を獲得している。これは早稲田大学が国内の他大学よりもグローバル時代に応じた自己改革をしてきたと言えよう。

このような現状が早稲田大学にはあるが、現在の日本では少子化問題がますます加速している。2010 年と比べると 2060 年には出生者数が 2010 年当時の半分である 48 万人にまで減少すると予測されている（「内閣府 HP」より）。そのような世の中になっていく上で、日本の大学も国内の学生と海外からの留学生が一体となる新しい形になっていくと考え

---

\* 本誌掲載に当たって、社会科学総合学術院笹原宏之教授の指導の下に作成された。

る。しかし、現状では大学受験の段階で海外の大学を受験できる制度が整いつつある。そのような制度がしっかりと整い、海外受験が当たり前になった世の中になったときに日本は世界に勝てるのであろうか。また早稲田は生き残っていけるのだろうか。

## 2 21 世紀を生き抜く力

前述のように日本の大学は世界ランキングの順位を下げている。しかしながら、基礎学力や道徳面に関して、日本は全国（地方）で学力を身につけるシステムが構築されている。これとは対照的に、世界では学力習得のシステムが都市部に集中していることから、日本の教育は世界から尊敬されているという事実もある。

ではなぜこんなにも順位を落としているのだろうか。その原因はあるスキルの習得に課題があるからである。そのスキルとは「21 世紀型スキル」である。この 21 世紀型スキルとは、国際団体 ATC21st によって定められたもので、変化が激しく予測が非常に困難なこの 21 世紀を生き抜くための実践的な問題解決力、発見力に結実するような能力のことをいう。言い換えると、自ら問題を見つけ、創造力などを活用してそれらを解決していくこのスキルを習得しなければ 21 世紀を生き抜くことは難しい。大学の順位が下がっている事実を考慮しても、このスキルの習得のために教育を変えていかなければならない。その一歩となり得る変革が、受動的な学習から能動的な学習へシフトすることである。自発的に物事に取り組むことが必要不可欠であるといえるこの能力を現在のような受動的な学習では獲得することはできないだろう。

このような考えからか、早稲田大学では WASEDA Vision 150 というものを策定した。これは 1. 高い志をもった学生を世界中から集め、2. 世界平和と人類の幸福の実現を目指し、3. グローバルリーダーとして社会を支える人材を育成し、4. アジアのモデルとなり得る運営体制を確立することを目的としている。具体的な内容としては以下のようなものが挙げられる。

- 全学生の留学必須（現在の留学人数：3,300 人）
- 外国人学生数を 10,000 人に（全学生の 20%にあたる）
- 外国語による授業の割合を 50%に（現在は 10%）
- 少人数クラスの導入（多人数クラスではオンデマンドの導入）
- 対話型、問題発見・解決型の授業の割合を 50%に（現在は 10%）
- ボランティア、インターンの単位化
- クォーター制の導入
- 科目の再編、統合（密度の高い教育実現のため）

この WASEDA Vision 150 は 21 世紀型スキルを身につけるには非常にいい環境だと思う

れる。このビジョンを実現さえすれば世界からとり残されるリスクは激減するだろう。

### 3 未来の WASEDA の在り方

そこでここからは、教育に更なる変化が必要になるであろう 50 年後の時代に対応するために必要な能力を考察していく。

まず、50 年後の世界について現在言われていることは、AI の台頭である。英オックスフォード大学のマイケル・オズボーン准教授が同大学のカール・ベネディクト・フライ氏とともに著した論文、「雇用の未来—コンピューター化によって仕事は失われるのか」(AXIS 174 号『特集 ロボットデザインの未来動向』)によれば、ほとんどの仕事・作業が AI によって行われ、人間は職を失うことになるとされている。ではここで、未来の学生たちが身につけるべき能力はどのようなものなのだろうか。現段階で言えることは、「新たな職に繋がるアイデアを生み出せるクリエイティビティ」である。

1 つ具体例を挙げよう。1930 年代、洗濯機の登場で人は洗濯にかかる時間が大幅に削減された。これにより、時間が余るようになりその余った時間で様々な時間の過ごし方を見いだすことができた。このように、AI が台頭することによって余った時間が発生する。この時間で新しい知恵を創造することが 50 年後の世界に必要なことではないか。日本人は 1 を 100 にすることは得意だと言われている。しかし、この分野はおそらく AI が独占することになるだろう。しかし、0 から 1 を生み出す能力、つまりクリエイティビティは人間特有の能力であり、50 年後を生き抜く術である。この日本人が苦手としている 0 → 1 の力を養うのは大学の役目ではないだろうか。さらには、クリエイティビティを鍛えるためにその時々最新の情報を取り入れ、場合によっては授業化する行動力や決断力が大学には求められることだろう。

2015 年、野村総合研究所は「2035 年には日本の仕事の 49% が人工知能に奪われる」という未来を試算した（「日本の 49% が人工知能やロボットで代替可能に」より）。この中には、コールセンターのオペレーターやスーパーのレジ、乗り物の運転手など、将来的に人工知能や機械が取って代わるだろうと、一般的に想像できる職業も含まれる。しかし、オズボーン准教授は前述した論文において、以下のように語っている。「これまで不可能だった莫大な量のデータをコンピューターが処理できるようになった結果、非ルーティン作業だと思われていた仕事をルーティン化することが可能になりつつある」。これはつまり、機械に取って代わられる仕事は、上述したような単純作業だけではないことを示している。弁護士や警察のような、今までは人間による高度な能力が必要だったと思われていた仕事も、今後人工知能に奪われる可能性がある、とオズボーン准教授は分析している。

さらに、デューク大学のキャシー・デビッドソン教授は、ニューヨークタイムズのイン

タビューにおいて、「現小学生の65%は今ない職に就く」と発言している（「Education Needs a Digital-Age Upgrade」より）。現在小学6年生の子供が就職するのは、今からわずか10年後の未来である。実際に、10年間で社会は大きく変化する。現在のように、ほとんどの人がスマートフォンを持ち、LINEやTwitterなどで世界中と瞬時に繋がることのできるという未来を、10年前に想像できた人はいなかったであろう。確かにスマートフォンのアプリを開発する仕事は、10年前は存在しなかったのである。

このように、未来はめまぐるしく変化している。人類の歴史の中でテクノロジーは時代を追うごとに常に進化してきた。しかし、その変化のスピードが昔とは比べられないほど、近年ますます速くなっている。2年、3年先の未来ですら正確に予測することは誰にもできないのである。したがって、今大学生が大学で学んでいる学問が、将来役立つと断言することはできない。どのような未来が待ち受けているのか、誰も分からない。その未来は、今の社会とは全く別のものかもしれない。そのような、これからの時代を生きていくためには、何か既存の分野に特化するのでは不十分である。どのような時代でも生きていける、どのような社会からも求められる、普遍的な能力が必要となるのである。

#### 4 100周年に向けた社会学の存在意義

加速度的に変化していく時代の中で、早稲田大学社会学部は「早稲田の看板学部」になるためにどのような改革をしていけばよいのであろうか。

社会学部では、政治学、経済学、商学、法学、教育学、国際関係学、人文学、自然科学などの学問分野を取り扱っている。しかし、前述にもあったように、未来はめまぐるしく変化していき、今大学で学んでいることが、将来社会人として働き、生きていくために役に立つとは限らない。そこで私たちは「幅広い視野を持って、未来の変化に柔軟に対応できるジェネラリスト」になるために、3つの新たな学問領域を提案する。

##### ① 情報、技術活用教育

##### ② 未来志向教育

##### ③ 人材教育

である。我々が考える3つの学問領域の内容は、以下の通りである。

##### ① 情報・技術活用教育

最先端の情報、技術を体感することで、それを用いた活用法を考える。

我々の生活の中では、日々新たな情報、技術が生まれている。その情報、技術を我々はしっかりと習得し、利用できているであろうか。例えばLINEを例に挙げてみる。皆は、ほぼ全員の人がLINEを使って友達や家族とチャットをしているであろう。では、その

LINE がどう作られ、どのような仕組みかを理解して利用している人はどれくらいいるであろうか。「私にはできない」と思った読者が大半であろう。このように、ただ与えられた新たなデバイスや技術を、画期的であると鵜呑みにして、何も知らないまま使うことは、今後プライバシーの侵害や、社会で働く上で弊害が起こるなど、非常に問題であると考ええる。

したがって、情報・技術活用教育を行うことにより、日々生み出される正しい技術、正しい情報を学生が会得することで、現代という時代の最先端を担うことができると考える。

## ② 未来志向教育

めまぐるしく変化する時代の潮流に、自分はどのように貢献するかを考える。

情報・技術活用教育によって得た知識を、そのままインプットしたままでいたら、何も意味がない。そこで、その技術をアウトプットする機会が必要である。それが、「未来志向教育」である。最先端の技術、情報を現代の時代でどのように活用するか、そして現代の情報、技術を組み合わせて、未来にどのような新しい技術が提案できるか、というような「新たなアイデア、想像力を養う力」を植え付ける教育である。これによって、未来での自分の存在価値を再認識し、どのように社会に貢献できるかを徹底的に深掘できると考える。

## ③ 人材教育

社会のリーダーになるために必要な人間力を高める。

人材教育というのは、企業に入ってからすればよいのだろうか。入社前は今のよう、大学という荒野に、ただ個人を放り込み埋没させればよいのか。今の時代はそれでよいかもしれない。しかし、50年後は違うと考える。今よりも何倍も速いスピードで時代、時間は変化していくため、求められる人材像というものも、加速度的に変化していく。よって、未来に常に対応し、時代を牽引できる人材を輩出するために、人材教育を徹底的に行う必要があると考える。具体的には、リーダーシップ教育、論理的思考力育成授業、プレゼンスキル向上講義、長期インターンシップの必修単位化、などが挙げられる。

## 5 おわりに

以上の学問領域を提案するとともに、最後にまとめを記す。

まず、「50年後にはスペシャリストではなく、ジェネラリストが必要不可欠」。そのことに対応するためには、今まさにジェネラリスト育成を行っている社学は必要不可欠なの

である。しかし、今の学問だけでは、社会科学部の存在意義が危ぶまれる。情報技術活用教育、未来志向教育、人材教育を行うことにより、「世の中に見えないシステムを洞察し、人々を説得し、現実的な対応を考えることができる人材」を育成していく必要なのである。

私たちが70歳になったとき、「早稲田の看板学部、社会学」そして「日本の看板学部、早稲田大学社会科学部」として、社会科学部が、よりよい教育の質と、素晴らしい学生に囲まれて、改革を繰り返し、未来永劫繁栄していくことを願って、この論文を締めくくりたい。

#### 文献

- 「World University Rankings 2017」[https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2017/world-ranking#!/page/0/length/25/sort\\_by/rank\\_label/sort\\_order/asc/cols/rank\\_only](https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2017/world-ranking#!/page/0/length/25/sort_by/rank_label/sort_order/asc/cols/rank_only) (2016年12月15日。)
- 「内閣府 HP」[http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/s1\\_1\\_1\\_02.htm](http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/s1_1_1_02.htm) (2016年12月15日。)
- 「早稲田大学 HP」<https://www.waseda.jp/top/news/35129> (2016年12月15日。)
- 「Waseda Vision 150 トップ」<http://www.waseda.jp/keiei/vision150/index.html> (2016年12月15日。)
- 「日本の49%が人工知能やロボットで代替可能に」([https://www.nri.com/jp/news/2015/151202\\_1.aspx](https://www.nri.com/jp/news/2015/151202_1.aspx)) (2016年12月15日。)
- 「THE FUTURE OF EMPLOYMENT: HOW SUSCEPTIBLE ARE JOBS TO COMPUTERISATION」([http://www.oxfordmartin.ox.ac.uk/downloads/academic/The\\_Future\\_of\\_Employment.pdf](http://www.oxfordmartin.ox.ac.uk/downloads/academic/The_Future_of_Employment.pdf)) (2016年12月15日。)
- 「Education Needs a Digital-Age Upgrade」([http://opinionator.blogs.nytimes.com/2011/08/07/education-needs-a-digital-age-upgrade/?\\_r=1](http://opinionator.blogs.nytimes.com/2011/08/07/education-needs-a-digital-age-upgrade/?_r=1)) (2016年12月15日。)